平成 28 年度　笹川科学研究助成　学術研究部門

研究番号：28-132

研究課題：キリシタン弾圧期における宣教師の書簡に関する研究―潜伏下の宣教師は日本をどう見たか―

小泉　優莉菜　　ポーラ伝統文化振興財団・学芸員

かくれキリシタン信仰は、キリスト教カトリックが弾圧という歴史的背景の中で変容した、日本の特異な信仰である。長崎県では、現在でもかくれキリシタン信仰が信者らによって伝承され続けている。筆者は、綿密なフィールド・ワークを基にして、現代のかくれキリシタン信仰の研究を行ってきた。現在の彼らの特異な信仰形態は、潜伏期（江戸期）にキリシタンたちを取り巻いていた環境とそれらとの文化摩擦から生じたものである。「取り巻いていた環境」とは、「幕府」「庶民（町人・農民）」そして「宣教師」たちである。ゆえにかくれキリシタン信仰は、土着の風習や民俗と、カトリックの祭式が融合し、転訛したものであるといえる。では、江戸期のキリシタンたちは、どの程度信仰に精通し、教義に則った信仰活動が出来ていたのだろうか。そして、宣教師たちは潜伏下のキリシタンとどう向き合い、伝道を行ったのだろうか。本研究ではその考察の手がかりとして、“Lettera anuua del Giappone”という史料の調査を行なった。日本で宣教活動を行っていた宣教師たちは、本国ヴァチカンへと、大量の書簡を送っている。その報告書からは、潜伏期の直前・直後の「宣教の方法」「日本社会の様子」「信徒たちの様子」などを知ることができる。この調査によって、これまで自身の進めてきた、潜伏期のキリシタンに関する研究をより深化させることができた。以下の分析はその調査を基にしたものであるが、紙数の関係で１つのみを説明する。

写真　長崎県生月島・壱部地区川﨑家の御前様（2013 年 12 月 15 日撮影）

（原文）

Seguitorno subito le serve; nachiamata Cecilia, e l’altra Maria, & un fanciullino chiamato Michele di età di tre anni; il quale come non sapeva ancora temere, non volcndo star nelle braccia di chi l’haveva portato fin li, se n’anuò alla volta di sua madre Cecilia, polta gia nel luogo doveva esser decapitata, la quale abbracciando amorosamente il figlio, e con molta divotione dlcendo Giesù Maria, sù decapitata da un seruitore del Tono, che col primo colpo tagliò la testa alla madre, e col secondo all’innocente figlivolino. L ultima sù l’altra serva Maria, che senza paura di tanti morti, postasi in ginocchioni, e chiamando con gran sentiment in suo soccorso Giesù Maria, diede lasua, che le sù taglitata di età venti, due anni.Maorti li serui di Dio, presero li Gentili le store, e coprirno con quelle li cadaveri, ma nel voler coprire quello di Maria moglie di Gabrielo, trovorno, che non solo stave il capo non diviso del tutto dal busto, ma che ancora diceva Giesù Maria. Non cessò la serva di Dio con con haver la maggior parte del collo tagliata, essendo più morta, che viva, d’inuocar quei soavissimi nomi, che danno

la vita a I morti,

se non volessimo dire, che dopo morta per consusuione de’Gentili, il Creatore del tutto parlò per quella. Rimasero attoniti a tal vista, & a tali voci li Gentili, ma seguirno pure nella sua crudeltà, decollando di nuovo la serva di Dio:& inuolti i corpi di ciascheduno nella sua stora, attaccato ad ogn’vno di quelli un gran sasso presi, e tenutui in veneration da’Christiani.

（拙訳）

Cecilia と Maria と 3 歳の子供の Michele という召使いと子供がいた。Michele は子供で死の意味が分からなかった。彼は Cecilia に抱きつき、Cecilia は彼を抱きながら、首を刎ねられた。1 打撃目は母の首を切り、2 打撃目で彼の首を切った。その後は Maria であった。彼女はたくさんの死体に囲まれながらも恐れなかった。彼女もイエスとマリアの名前を叫びながら、22 歳で殺された。神の奴隷が死んだ後、異教徒はその死体を目につくところに置きたくはなかった。Gabriere と妻の死体を覆おうとしたが、妻の死体は命を切り取られてはおらず、未だにイエスとマリアの名前を言い続けていた。

これは奇蹟であった。これは神の声であった。異教徒は驚き、その神の奴隷の首をもう一度切った。そして死体を一つずつ袋に入れ、海に投げた。なぜかというと、死体をキリシタンが拾って、死体のために祈らないようにするためである。

この記述からは、前述の「宣教の方法」「日本社会の様子」「信徒たちの様子」の内、「宣教の方法」と「信徒たちの様子」について知ることができる。まず注目したいのは、異教徒（キリシタン以外の日本人）はその死体を目につくところに置きたくないため、ガブリエーレとその妻の死体を覆おうとしたという場面である。記述によると、そのとき妻にはまだ命があり（命を切り取られてはおらず)、イエスとマリアの名前を言い続けていたという。そして宣教師はこれを「奇蹟」であるとしている。ここでは無論、死を超越するというイエスの教えが実践されたことが示されている。この記述以外にも聖書の教えとの対応が見られる事例を多く発見することができたが、このことからは、当時の宣教師たちが、迫害での出来事を聖書から解釈することで意味付けし、残った信者たち、さらには自らの信仰心の支えとしていたことが分かる。

そして、その次に続く異教徒側の対応は、当時の「日本社会の様子」を知る上で参考になる。異教徒は、首を切られてもなお生きていることに驚き、その首をもう一度切った。そして死体を一つずつ袋に入れ、海に投げたが、その理由を、死体をキリシタンが拾って、死体のために祈らないようにするためであったと記述している。この文章を書いているのは宣教師であるため、この理由が事実であるかは不明であるが、この記述に拠るならば、当時のキリシタン以外の人々は、キリシタンが「死体のために祈る」者であること、そして死体が信仰対象となりうることを知っていたことになる。無論、死体が信仰対象になりうるということは、御霊信仰や即身仏信仰から類推できることではあるが、この行為は、既に日本のキリシタンの間で聖人信仰が出現していたことを示しているとも考えられる。ゆえにこの文からは、当時の「宣教の方法」「日本社会の様子」「信徒たちの様子」について知ることができるのである。

ここでは一つの事例を挙げることしかできなかったが、2016 年 10 月にドイツに於いて開催されたシンポジウム（日本民俗学会・ドイツ民俗学会共催）における筆者の研究発表“The Transformation of Kakure Kirishitan Faith in Modern Times: Merits and Demerits in the Activity for the Inscription of World Heritage Site”(2016 年 10 月 27 日、於：ミュンヘン大学（ドイツ)、論文集印刷中）でも述べたように、潜伏下のキリシタンたちは、自身ら独自の伝承方法や、解釈によって、信仰の保持を行っていったことが分かる。

折しも、2017 年 1 月 21 日に遠藤周作の小説『沈黙』を映画化した『沈黙―サイレンス―』が劇場公開され、キリシタンの中でも、特に江戸期の潜伏キリシタンと宣教師との関係について国内外で注目が集まりつつある今、17 世紀当時の信者と宣教師についての正確な知識は、今後この文化の世界遺産への登録を推進する上でも重要になってくると思われる。宣教師たちが潜伏下のキリシタンとどのように向き合い、伝道を行ったのかを明らかにした本研究は、それゆえに、キリシタン研究という領域に留まらず、今後のキリシタンに関する認識をより事実に即したものにするための第一歩であったと言ってよい。この研究を今後論文その他の媒体によって公開していくことが、本研究の社会的還元になるだろう。